

文末語気詞とイントネーション

—情報源から見る中国語“啊”、“吧”と日本語「よ」、「ね」

楊 曉 安 久井 恭子

文末語気詞は口語交流中の特有の形式において、文法上だけでなく、語義と語用の面でもすべて文に対して大きな影響を持っている。

いかなる言語も少なくない文末語気詞があり、異なる文末語気詞が異なる語気内容を表すだけでなく、たとえひとつの文末語気詞であっても、前の文あるいは言語環境の違いによって種々の異なった内容を表すこともできる。それは疑問の文末に付き、質問や探索を表すかもしれない；陳述の文末では解釈、説明、推定や推測を表し、事が誰の目にも明らかであるということ強調して説明するかもしれない；命令の文末では懇請、激励、指摘、警告、請求、催促、相談などの語気を表すかもしれない；同じように感嘆の文末に付くことで、賛美、興奮の語気を表すこともできる。つまり、口語の中で多くの文にもし文末語気詞の補充がなかったら、我々は一種の不完全な感覚を持つ可能性があり、この種の「不完全」は語気上のものであったり、文法上のものであったり、同様に語義上のものであるかもしれない。

言語の運び手は発音である。発音は多くの元素により構成され、音声の角度から見ると、いかなる発音の断面にも音質方面的特徴があるだけでなく、高低、強弱、長短などの超音質特徴も含み、他に会話速度、韻律、比例関係なども発音の重要な構成元素である。これらの言語情報以外の元素は語義の内容とさほど関係がないように見られるが、実際は、それらは文法構造形式へ影響することができるだけでなく、文の意味理解に、また交際する双方の感情の交流に影響することもできる。文末語気詞には豊富な表現伝達機能があり、それは様々な言語情報を負荷している。本文は、文末語気詞「よ」、「ね」と“啊”、“吧”の比較を通じて、共同行為の角度から言語情報源と文末イントネーションの関係を考察しようと試みる。

一．話行為の過程と情報源

言語は人類の交流手段である。言語交流活動から出発し、交流性の言語活動モデルは、言語技能の説明を情報コード、情報出力、情報受理、情報解読のようなひとつの完全な過程に分ける。

話し手はまず頭の中で伝達したい意義を形成し、それから適切な言語コードを選び、言語の情報記号形式を形成する。その代表的な形式は、発音をもって運び手の言語記号の鎖

としており、これは一つ目の情報コードと呼ばれる過程である。コードがのちに形成する情報コードを送信するのが第二段階で、つまり情報出力の段階である。この段階では、話し手がすでにコードを完成し、かつ一定の情報記号の鎖を負荷し、音声の形成を通じて受業者に伝達する。聞き手は耳が直接受理するこの特定の発音によって、記号の鎖の過程は第三步であり、この一步は実際には第二步と同時に進み、この段階は情報受理と呼ばれる段階である。しかし、ひとつの音声の断片を聞いただけでは交流の中に実質的な意義はなく、聞き手はさらに第四步で同じコード規則を用いる必要があり、受け取る音声記号系列はもとの意義情報で、音声記号はもとの情報内容であり理解を得て、最後に言語形式交流の全過程が完成する。

言語交流は双方向活動である。交流はただ出力情報と受理情報にすぎない。出力情報とは話すを書くで、受理情報とは聞くと読むである。しかし、交流の全過程から見ると、話し手は決して一定の情報内容を持っておらず、その発したことばの形式は、ただひとつの情報を得るための請求、ひとつの質問でしかなく、話し手の回答がやっと情報内容の所在となるかもしれない。言語交流の目的はただひとつで、それはつまり交流する双方の情報を共有するところまで到達することである。ここにはひとつの情報源が存在しており、いったいどちらに問題があるのか、つまり交流する双方の誰が情報を持っているか、誰が情報源の所在なのか？ということである。一般的に、我々は特定の言語環境の下、双方の対話内容によって誰が情報を持っているのかははっきりさせることは全く困難なことではない。たとえば、

- | | |
|---------------------------|-----------------------|
| (1) A : 老师什么时候回国？ | 先生はいつ国に帰りますか？ |
| B : 老师下星期六回国。 | 先生は来週の土曜日に帰国します。 |
| (2) A : 明天下午三点在 402 教室开会。 | 明日午後三時に 402 教室で会議を開く。 |
| B : 明白了。 | 分かりました。 |

明らかにこの二つの会話の情報源は異なっている。(1)の情報源はBにあり、A文はBに向かって情報内容を要求しており、B文はAの要求について自己が持つ情報をAに伝え、それによって情報の共有に至る。しかし、(2)は異なり、情報源はAにあり、A文はBが知らない情報内容を告げ、B文はただ情報を受理しただけである。この交流結果で双方は情報内容を共有することとなった。この二つの会話はひとつの情報内容の完全な伝達過程を表しており、区別は情報源を持つ者が異なること、情報源の所在が異なることにある。

二．文末語気詞と情報源

情報源はいったい会話をする者のどちらにあるのか？言葉を変えて言うと、話し手は情

報を受信するのか、それとも情報を送信するのか？多数のセンテンスは語句を通して、構成される言語形式を非常に明確に示している。わかりやすく言うと、疑問句の多くは情報を受信し、陳述句、命令文、感嘆文は多くが情報を送信し、それは上で(1)と(2)により示したような様子である。我々はおおよそ借用語と文法の関係に基づいて、情報の送信方向がわかり、情報源の所在を知ることができる。しかし、中国語と日本語の中の少ない文で、我々がそれに異なる文末語気詞を付け加えた後、異なる情報送信方向が示され、異なる情報源の所在が示される可能性がある。以下の例文を見てほしい、

- (3) a 明天下午三点在三楼会议室开会啊！
 b 明日午後三時に三階の会議室で会議があるよ。
 (4) a 明天下午三点在三楼会议室开会吧？
 b 明日午後三時に三階の会議室で会議があるね？

以上の例文を詳細に理解すると、我々は、同様の文の後にもし異なる文末語気詞を付け加えたとなると、示される情報源は根本的な違いがあると容易に気づくことができる。

(3) a と (3) b の文末に付け加えた“啊”と「よ」は話し手が情報内容を持っていると表し、彼は聞き手に自己の持つ情報を送信し、また彼は情報を持つ者であり、当然情報源の所在である。しかし(4) a と (4) b の文末に付け加えた“吧”と「ね」は、話し手がけして情報内容を持ってはいないと表し、少なくとも確実な情報内容は持っておらず、彼は聞き手に情報を要求するか、あるいは相手を通じて自己の持つ情報内容の真偽を確認しようとしている。この時情報を持つ者は聞き手で、情報源は聞き手の方にある。もし我々が情報送信の起点から見るとすれば、(3) の情報起点は話し手にあり、(4) は聞き手にある。

片桐恭弘氏は「終助詞ヨは話し手に帰属する情報を表すために用いられる。それに対してネは聞き手に帰属する（と話し手の判断している）情報を表すために用いられる。」と考えている。中国語も同様に、文末語気詞“啊”（“阿、呀、哇、哪”などを含む）は、普通話し手が情報を持っている時に用いられ、また「吧」は普通話し手が情報を要求する時に用いられ、すなわち聞き手が情報を持っている時である。このように片桐恭弘氏が述べたように、自己が確かな情報内容を持っていて他人の問いに答えるとき、情報源が相手方にあることを示す“吧”は使用できない。たとえば、

- (5) A：你是谁？ どちらさまですか？
 B 1：我是田中啊。 田中ですよ。
 B 2：我是田中吧。 田中ですね。
 (6) A：你是哪国人？ お国は？
 B 1：我是中国人啊。 中国ですよ。

B 2：我是中国人吧。 中国ですね。

AはBがどんな人か知らず、どの国の人であるかBに情報を要求しており、B自身が明確な情報内容を持っていて、情報源の所在であることによって、情報を持っていると示すB 1の回答のみが用いることができ、情報源が相手方にあるB 2の回答は用いることができない。

しかし文末語気詞は全くこのように簡単なものではなく、実際はひとつの文末語気詞がしばしば入り組んだ多くの語意内容を表す。たとえば中国語の“啊”と“吧”は、異なる内容の文の後ろに付くことにより多種の語気、語意内容を表す。たとえば“啊”は疑問句の語気を使用することができ、暖かく硬さが目立たない；解釈、説明の語気を表すことができ、明らかな事を説明する；喜んだ肯定あるいは同意の語気を表すことができる；懇請、激励、指摘、警告などの語気も表すことができる；賛美、興奮の語気なども表すことができる。“吧”は推定、推測、を表すことができるだけでなく、探索や同様に請求、催促、相談の語気なども表すことができる。それらは文中でいったいどんな語意内容を示すのか、具体的な文の内容にしたがって把握する必要がある。我々は講談社出版『日本語大辞典』の中からも、日本語の「よ」と「ね」が表す語意内容も同様に豊富であると見ることができる：「よ」は感動または呼びかけの意、命令・禁止・依頼・勧誘の意、軽い感動、なじる気持ち、を表すことができ、念をおしたり、強めていうことにも用いることができ、さらに語勢を添え、語調を整えることもできる。「ね」は感動・詠嘆・感想などを表すことができ、疑問にも用いることができ、さらに語勢を強めることなどもできる。事実、中国語でも日本語でも入り組んだ言語世界で、このような文末語気詞が実際に表すことのできる語意内容は上で述べてきたよりも非常に多く、非常に豊富である。

文末語気詞は様々な語意内容を表すことができるが、具体的な交流の中ではそれらはその中のひとつの身分として文に入るだけにすぎない。それらが負荷する語意内容は文の内容の変化に伴って変化することができるだけで、また自己の音声変化に伴って変わるときもあるかもしれない。前で我々がすでに述べてきたように、文末語気詞“啊”と「よ」は話し手が情報を擁する人だと表し、話し手は情報を伝達する起点であり、情報源は話し手一方にある；“吧”と「ね」は聞き手が情報を擁する人だと表し、聞き手は情報を伝達する起点であり、情報源は聞き手一方にある。この帰納は従来の模式にすぎないと言うことができ、音声要素をほうっておいて作り出された帰納である。実際は、言語現実はこのように簡単ではない。たとえば、

- | | |
|-----------------|---------------|
| (7) A：老师什么时候回国？ | 先生はいつ国に帰りますか？ |
| B：下星期六吧。 | 来週の土曜日ですね。 |
| (8) A：你说什么啊（呀）？ | 何言ってるのよ？ |

B：我什么也没说啊。

何も言っていないよ。

例(7)は文脈から見ると、Bが情報を擁する者、情報源の所在となるが、使用する文末語気詞は“吧”と「ね」である。また語感上から見ると、それらは何の不自然なところもない。例(8)の中のAは何の情報も持っておらず、情報源はB一方にあるが、二つの文共に“啊”と「よ」を用いている。それらは語感上に少しもおかしなところはない。(8)のAは、実際はまったく疑問ではなく、けして情報を要求する意思もなく、語意上にはっきり現れているのは非難と不平だけであるという人がいるかもしれない。しかし、我々は注意深く理解するとすぐに知ることができる。非難と不平と同時に、それはまた確かに疑問の語意を内に含んでおり、我々は文中から“你说的是什么？”(何を言ったのですか？)“你为什么那样说？”(なぜそんなこと言うの？)などの語意内容を読み取れるだろう。

これ以外に、文末語気詞によって表される意味の範囲は非常に広く、情報を請求する、または情報を伝達するのに全く関係のない文も多くあり、それらは一種の感嘆(漂亮的星星啊！/美しい星よ！)や、一種の説得と希望(你们不要那么快，等等我啊！/そんなに急がないで、私を待ってよ！)を表したり、相談(那么，咱们明天去吧。/じゃ、明日行きましょうね。)や、請求(你在那儿等着吧。/そこで待っていてね。)を表したりし、これらの文は大部分が感嘆文や命令文で、したがって普通情報の伝達と要求の問題は何も存在しない。

三．イントネーションと情報源

以下の例文を見てほしい、

(9) a そんなこと言わないでくださいよ。(上昇)

b そんなこと言わないでくださいよ。(下降)

井上優は、ヨが上昇や下降のイントネーションの違いを伴っていると異なった効果があると考えた。上の(9)aは聞き手の将来の行動に対する純粋な依頼であり²、(9)bは聞き手の過去の行動に対する異議を表わしている。以下の中国語の文(10)と(9)の文の意味は同じだが、中国語は文末語気詞の強度変化によって(9)と同じ効果を表わしている。

(10) a 不要那样说啊！(“啊”強く読む) 依頼

b 不要那样说啊！(“啊”軽く読む) 異議

以上(9)(10)は発音変化によって異なった語意表現の効果に達し、日本語は文末語気詞のイントネーションの昇降変化を、中国語は文末語気詞の強さの変化をそれぞれ選び、用

いる手段は異なるものの、示される語意内容変化は非常に似通っている。

引き続き以下の文を見てほしい、

(11) a あしたの会議ここでするんですね。(上昇)

b あしたの会議ここでするんですね。(下降)

明らかに(11) aの文末語気詞「ね」は文末の上がり調子を用いて、話し手が聞き手から明日の会議がここで行われるかどうかを確認しようとしていると表し、情報源は聞き手一方にある。(11) bの「ね」は文末の下がり調子を用いて、話し手が自己で情報を持っており、情報源であると表わしている。彼は聞き手に明日の会議が行われる場所を告げただけで、聞き手に情報を伝達しただけである。

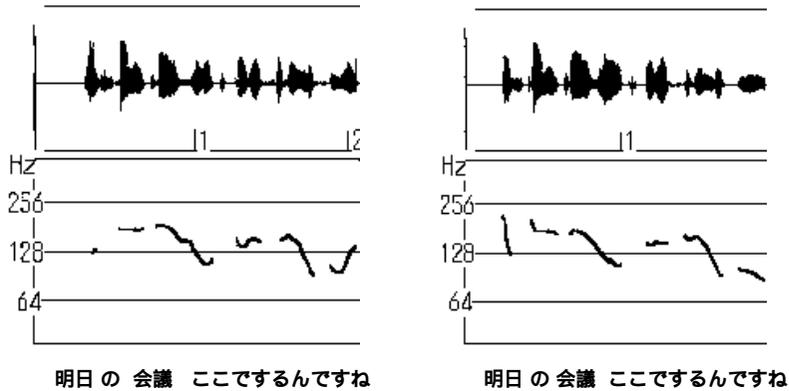
(12) a 明天的会议在这儿开吧？

b 明天的会议在这儿开吧。

(11)と異なるのは、中国語文(12) aと(12) bは文章記号からだけで情報源の所在が判断できるということである。(12) aは疑問符を用いて、話し手が明日の会議がここで行われるかどうかを知らないか、確信できないかで、聞き手の回答の中から確認を得ようとしていると説明している。以上のことからわかるように、話し手自身確かな情報を持っておらず、情報源は聞き手一方にある。(12) bは文末が句点であり、話し手が明日ここで会議が開かれるという決定をすでに知っているか、彼自身が決定者であると表わしている。どのような理解をしたとしても、話し手が適切か、またはそれに相当する程度の情報を持っていて、情報源は自己一方にあり、話す目的が情報を相手に送信し、情報を共有することにあると説明することができる。ここで我々は声に出して読む必要なく、ただ文章記号に基づくだけで情報源がいったい交流するどちらにあるのかはつきとさせることができる。以上のことからわかるように、中国語の文章記号の標識機能は本当に強いものである。しかし、我々はこのようなひとつの問題を考えないわけにはいかない: つまるところ、言語の形式的な運び手は結局音声であり、我々は音声を通じることでしか生き生きとした言語世界を感知することができず、音声を通じることでしか言語表現の中の細かい情感、語意区別を子細に理解することができない。文章記号は書き言葉を補うためだけのもので、標識記号を付け加えることで話し言葉中の語気の非の打ち所のない表現をすることはできない。また、豊富な言語表現にとって、それは非常に限りがあり、不完全なものである。我々は、言語の音声的形式の起点に戻り、音声変化に対する綿密な観察と分析を通じることでのみ言語表現上の極めて細かい区別を見いだすことができる。

例(11)の周波数(F₀)曲線図を見てほしい。

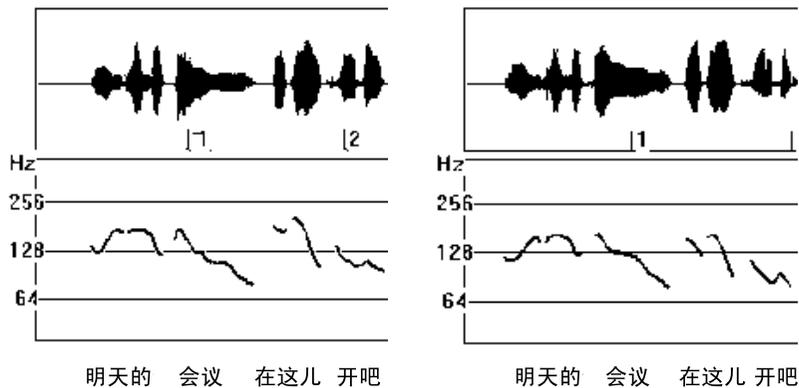
图1. 左(11)a, 右(11)b



情報源が聞き手一方にあると明らかに表している(11)aの文末語気詞の周波数曲線は上昇の勢いを示し、情報源が話し手一方にあると表している(11)bの文末語気詞の周波数曲線は下降の勢いを示す。二つの文の中で「ね」の昇降が異なる以外、その他の部分の周波数軌跡は基本的に一致している。したがって我々は、二つの文が語意上に表す情報源の変化は文末語気詞「ね」の周波数の昇降変化によって実現するものであるとすることができる。

さらに同様の意味である中国語文(12)の二つの文の周波数(F₀)曲線図を見てみる。

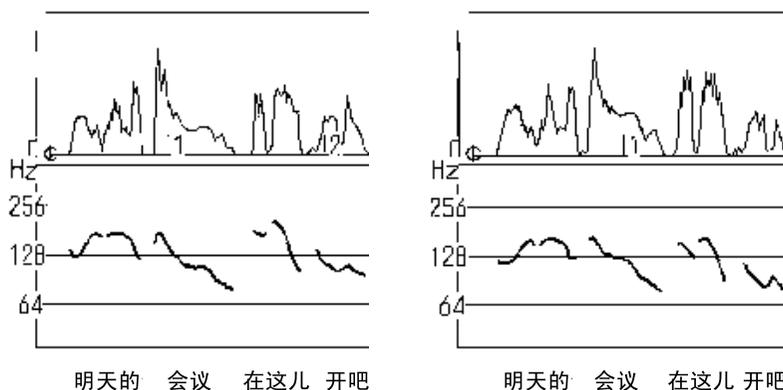
图2. 左(12)a, 右(12)b



(11)と異なるのは、(12)aと(12)bは周波数曲線の軌跡にほとんど何の違もなく、下降の勢いを示し、文すべての周波数の線型も基本的に一致していることである。しかし情報源が聞き手一方にあると表わす(12)aの文末語気詞の音域下線(107Hz ~ 97Hz)は、

情報源話し手一方にあると表わす(12)bの文末語気詞の音域下線(96Hz ~ 56Hz)より明らかに高くなっている。その他に、我々はこの種の区別は中国語の中でしばしば振幅の強弱にまで影響すると気づいた。図3の振幅図を通じて、我々は(12)aの中の“吧”の振幅(75dB)は(12)bの(52dB)より強くなっているとはっきり見ることができる。

图3.(左(12)a, 右(12)b)



ここで、我々は以下の結論を得ることができる：

文末語気詞は情報源が交流する双方のどちらにあるのかを表し、中国語の“啊”、“吧”と日本語の「よ」、「ね」はイントネーションの変化に伴って変化することができる。“啊”と「よ」はイントネーションの昇降の違いにより、「依頼」と「異議」二種類の異なった語意を表わすことができるが、情報源に関することではそれらふたつには何の区別もなく、“啊”と「よ」は普通情報源が話し手一方にあると表わす。しかし、“吧”と「ね」には違いがある。一般的にそれらは情報源が聞き手一方にあると表わすが、それらはイントネーションの変化を伴って意味を表わす上で逆に、情報源が話し手一方にあると表す。注意する必要のあるのは、イントネーション変化が二種類の言語の中で異なった表現をしているということである。日本語「ね」の変化は、主として周波数曲線の変化に表われる：周波数が上昇の曲線を示す時、情報源が聞き手一方にあると表し、話し手は聞き手に問いかけることで、情報を確認する；周波数が下降の曲線を示す時、情報源が話し手一方にあると表し、話し手は聞き手に情報を送信している。これに対して、中国語の“吧”の変化は、主として音域下線の高低と振幅の強弱に集中している：音域下線が比較的高く、振幅が比較的低い時、情報源が聞き手一方にあると表し、発言の目的は聞き手に問いかけることで、情報内容を確認することにある：音域下線が比較的低く、振幅が比較的低い時、情報源が話し手一方にあると表し、話し手は聞き手に情報内容を送信している。この時送信される情報の確定度合いは、日本語と比べて比較的低くなり、その中には推定の意味がある部分が含まれる。

四．イントネーション表現の差異

現在我々が考えなければならないのは、イントネーションが異なった情報源を表わすことについて、なぜ中国語と日本語の中で異なった音声形式が使用できるのか？ということである。これは明らかに中国語と日本語の音声上にある異なった特徴と関係がある。

イントネーションは、語句と関係がある一種の総合的な発音表現である。羅常培と王均は「語気のイントネーションと音声の高低、強弱、長短、速さは関係があり、高低の抑揚変化はとりわけはっきりしている。」(羅常培、王均、1957)と考えた。胡裕樹も「イントネーションの内容は比較的複雑で、一般的に、それは主としてポーズやアクセント、昇降の三方面が含まれる。」(胡裕樹、1987)と言った。

一般的に日本語などのような非声調言語は、語句の音高曲線 (pitch contour) がイントネーションの音高変化を最も反映することができる：また中国語のような声調言語は、一字ごとに声調があるため、イントネーションの音高変化の状態を直接見ることはできない。また、字の声調と文調はときに混合し、人の判断に互いに影響する可能性がある。したがって、中国語のイントネーションは音高を比べると、音域の高低、アクセント、ポーズなどとの関係が密接である。

中国語のイントネーションの中で、音節イントネーションの昇降を感知するのは、主としてイントネーションの音域下限によって決定される：音域下限が下降すると、下がり調子だと感知され、音域下限が上昇すると上がり調子だと感知される。音域下限の下向きに伸びているのは、比較的安定している形態を示している；これによって、音域下限はリズム単元の完全性を反映することができる。文最後の音節の音域下限が下向きに伸びているのは、発音上に完全なリズム単元の材料が完成していると言うことができ、語意と情報の構造が完全なイントネーション表現になっている。もし、最後の音節の音域下限が下向きではなく、上向きに伸びていると、それはリズム上の独立性を失っており、イントネーションが安定していない形態を示す。そしてそれは語意と情報の構造が不完全であると表すか、あるいは話し手が他の情報内容を期待していることを表している。もし語意と情報の構造が不完全であったら、補うものを付け加える必要があり、補う方法は二種類しかない：一つ目は自己が説明を継続すること；二つ目は相手から説明を獲得することである。相手から説明を獲得することも、相手に情報を要求すると考えることができ、情報源は自然と聞き手一方にあることになる。

話し手がすべての情報を把握しており、彼自身が情報源である時、言語行為を実施する目的はこれらの情報を聞き手に伝達することで、これは情報の送信である。しかし話し手が情報を要求する、あるいは彼が持っているのが不確かな情報である時、聞き手の助けを借りてこの問題を解決する必要がある。言語交流の過程の中でこのような二種類の状態が存在している以上、イントネーションの昇降は情報の完全な送信と共有を助けることができるので、イントネーションの下降と上昇を用いることは、情報源がどちらにあるかを示

す音声上の一種の有効的な方法になる。情報源がどちらにあるか目立たせるために、決まった手段を結集する必要があり、その中のひとつは情報源が目立つようにある音節の発音を強化あるいは弱化することである。この時、中国語は日本語のように音高曲線の形態を変える方法を通じてではなく、音域を広げることと音の強さを増す方法を通じてある一部分を強化する。当然音域が広がり、音の強さが増すことに伴って、自然と呼応する音の長さも増すだろう。

上で述べてきた音域の広がり、音の強さが増すことと音の長さが増すことは当然相対的なものであり、我々の発音の印象の中に相対する最初の標準的な形式と言えるものであり、時に「錯覚」に聞き分けることがあるだろう。実際音を聞く中で、我々の耳はしばしば相手が情報源となる“吧”を上がり調子と聞き間違える。原因は何であろうか？私は三つあると考えた：その一、中国語は上がり調子の言語で、上がり調子は主として音高変化の構成から生じ、それによって我々はきわめて容易にある種の発音現象と上がり調子と関係づけることができる。その二、音声学分析結果から見ると、相手が情報源になる“吧”は情報源が自己一方にあると表す“吧”に比べて、音域下線は高くなり、したがって高く上がる錯覚がある。その三、語気詞“吧”はもともと軽声で、時に前の音節の影響により、ほとんど無声状態に近くなる。この音節を強化する必要がある時、音域が高くなるのに伴って自然と現れる音の強さの増加はその音量を大きくし、その上我々に音高上昇の錯覚を作り出す。

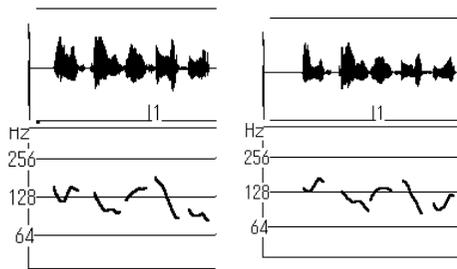
我々が述べたこれが「錯覚」であるからには、また「錯覚」ではない。「錯覚」と言うと、この種の昇降は日本語のように下がり調子が上がり調子に変わったのではないため、もともとの声調下降曲線はけして変化がない。また軽声の下降調子型は保留されていて、我々の耳は「聞き間違い」で上がり調子の調子型だとする。「錯覚」でないと言うのは、その周波数曲線が結局上に動くため、調子型は変わっていないが、声調の高さは大きな変化がある。それに伴う強度と長さの増加を、我々の耳が上昇の調子だと聞き取ってしまうのも道理がないとは限らない。

つまり、同様の状態で、中日二種類の言語は異なる処理方法を採用し、これはそれら各自の言語系統と密接な関係がある。

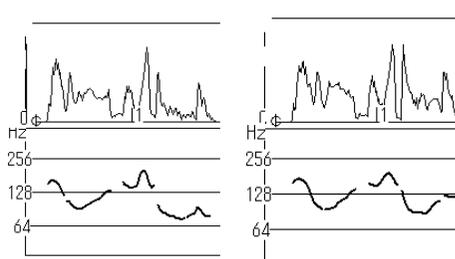
付録：

これは日本語「ね」と中国語“吧”の語図比較資料である。左は日本語文、右は中国語文となっている。日本語文部分の左辺は下降調子の文で、右辺は上昇調子の文である。中国語文部分の左辺は低音域の文で、右辺は高音域の文である。

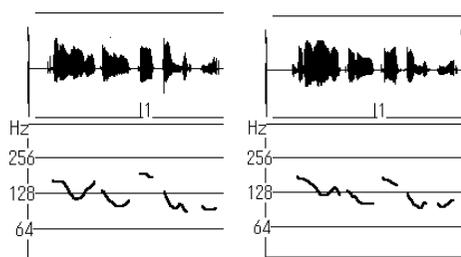
あの人は日本人ですね



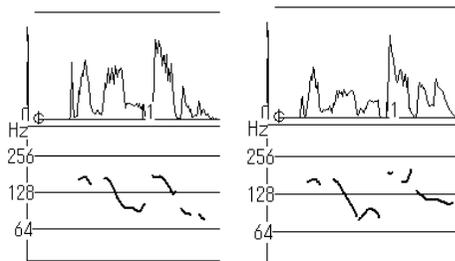
那个人是日本人吧



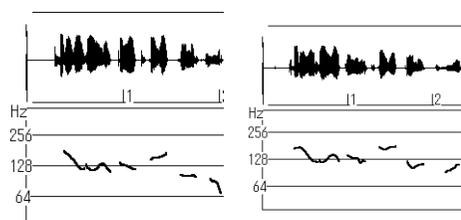
彼はあなたのお父さんですね



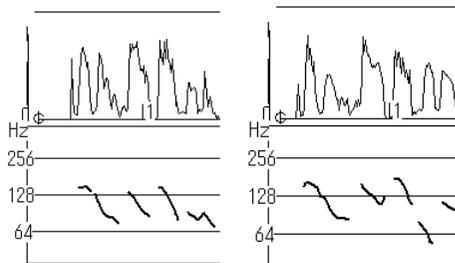
他是你爸爸吧



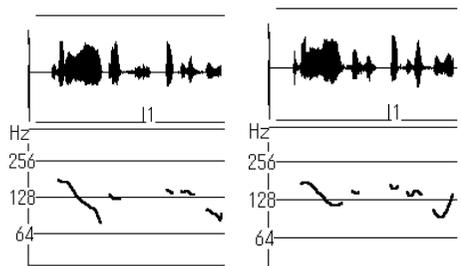
彼は大学に行きたがっていますね



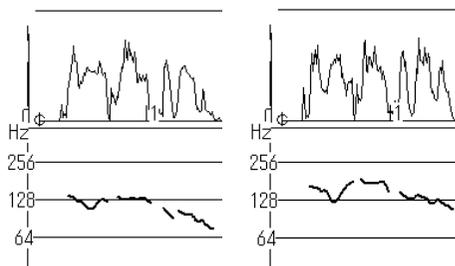
他想去大学吧



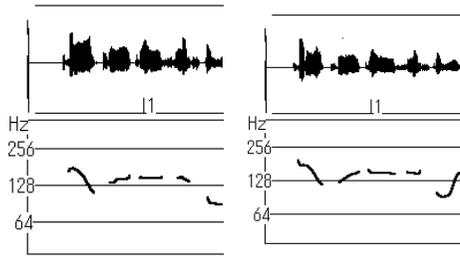
彼はあす出発ですね



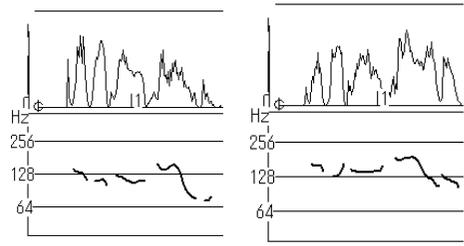
他明天出发吧



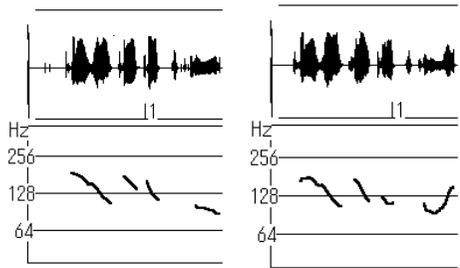
彼は昨日退院しましたね



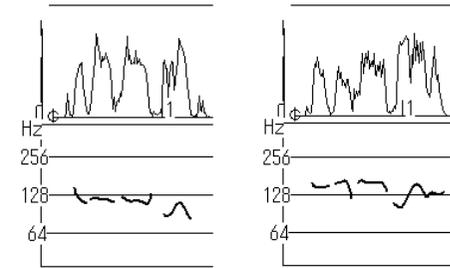
他昨天出院了吧



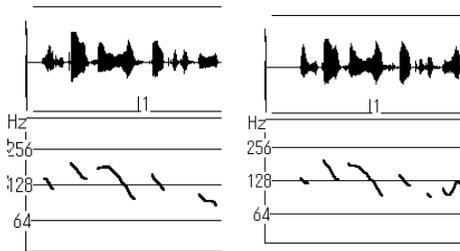
彼女はきょう帰ってくるね



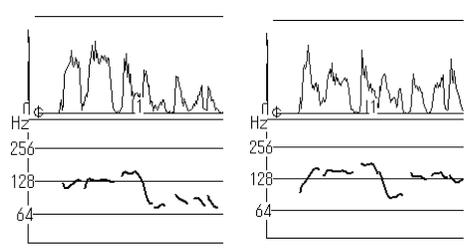
他今天回来吧



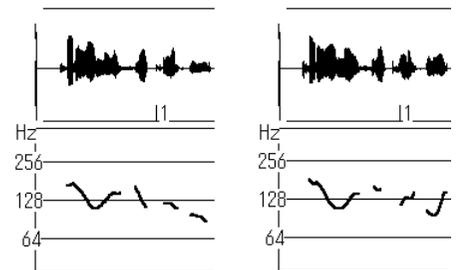
あしたは3時の飛行機ですね



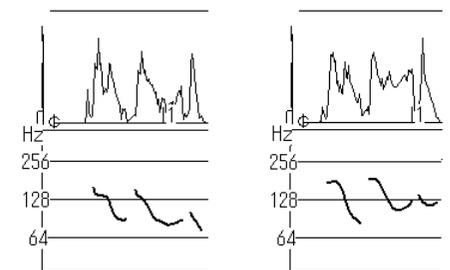
明天三点的飞机吧



彼はもうすぐ来ますね

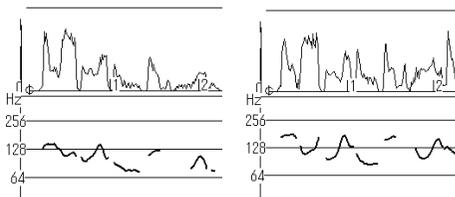
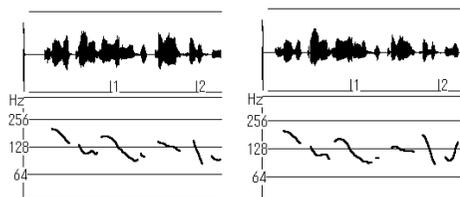


他马上来吧



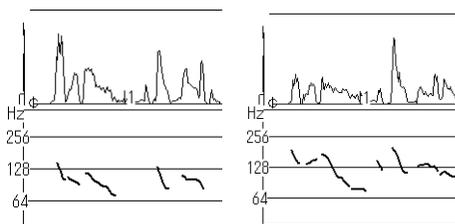
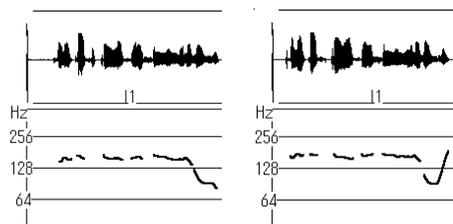
中国は日本よりも物価が安いですね

中国比日本东西便宜吧



このパソコンは最新のものだね

这台电脑是最新的吧



注

- 1 片桐恭弘 (1997)「終助詞とイントネーション」音声文法研究会編『文法と音声』p237。
- 2 井上優 (1994)『発話における「タイミング考慮」と「矛盾考慮」』国立国語研究所報告 105, 研究報告集 14, p.333-360。

参考文献

- 曹劍芬 (1986)「普通話輕声音節特性分析」,『応用声学』第 5 卷, 1986.No.4
- 馮勝利 (1997)『漢語的韻律、詞法与句法』, 北京大学出版社
- 厲為民 (1981)『試論輕声和重音』(『中国語文』1981.1)
- 吳宗濟・林茂燦 (1989)『実験語音学綱要』, 高等教育出版社
- 趙元任 (1979)『漢語口語語法』(呂叔湘訳), 商務印書館
- 音声文法研究会編 (1997)『文法と音声』, くろしお出版
- 音声文法研究会編 (1999)『文法と音声』, くろしお出版
- 蓮池昭子 (1995)「終助詞『よ』の機能」,『日本語教育』77
- 窪園晴夫 (1998)『音韻構造とアクセント』第 1 部・東京: 研究社出版